様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　６月１０日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７３０３２７
研究課題名（和文）　沖縄・八重山諸島における地域イメージの形成・展開と社会変容

研究課題名（英文）The formation and development of local images in Yaeyama Islands, Okinawa

研究代表者
多田　治（TADA OSAMU）
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号：８０３１８７４０

研究成果の概要：沖縄県八重山諸島のイメージ形成と社会変容について、文献調査とフィールドワークを行った。特に近年の観光・移住ブームに焦点を当て、宿泊・カフェ・織物・土産店・景観・環境運動・ダイビング・エコツーリズムなどを掘り下げる中から浮かび上がってきたのは、観光と移住、地元民と移住者、内と外、観光と環境、文化と自然など、概念上は区別される諸要素が、小さな島の中では分かちがたく、複合的・多義的に結び合う事態であった。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,500,000	0	1,500,000
２００７年度	1,300,000	0	1,300,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,700,000	270,000	3,970,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード：沖縄、八重山、イメージ、観光、移住、地域アイデンティティ、環境、自然

１．研究開始当初の背景

日本復帰・海洋博以後の観光立県を通して、「青い海」「亜熱帯」「固有の文化」「長寿」「癒し」といった沖縄のイメージは、県外に広くアピールされるとともに、県内にも浸透し、地域の産業振興や県民のアイデンティティの意識にも結びついてきた。私はこれまでの研究を継続し、沖縄のいかなる政治・経済的な文脈の中で、こうした沖縄イメージが形成され、いかに展開・変容してきたのか、その歴史的なプロセスを詳細に追い、またそれと連動して沖縄の社会・経済・文化がいかに変容し、そこにいかなる問題が生じ、現在に至っているのかを、調査研究を通じて明らかにしたいと考えた。

２．研究の目的

私は沖縄イメージの研究を継続し、沖縄固有の政治経済的な文脈の中でいかに沖縄イメージが形成され、社会・文化が変容してきたかを、調査研究から明らかにすることにした。今回は特に、調査対象地を八重山諸島にしぼり、文献調査とフィールドワークを行う。

従来この地域に関して、こうしたテーマでの社会学的な研究はほとんどない。私自身の沖縄イメージや観光の研究も、沖縄全般や沖縄本島中心へと、視点と対象が限られていた。

近年では2001年のNHK「ちゅらさん」以降、八重山の全国的な認知度は一挙に上がり、年間 77 万人の観光客に加え、移住ブームもこの地に集中する。新空港着工も相まっての開発ラッシュ、ミニバブルに、島の自然・文化・景観を守る動きも活発化している。観光開発・イメージ形成・ブランド化によって、島の人びとの生活や意識にどんな変化が起こっているか。

離島地域の中でも、特に観光開発・イメージ形成・ブランド化がうまく進み、また島ごとに独自の特徴を打ち出している八重山を取り上げることで、沖縄の中にも多様なイメージ形成や産業振興、地域アイデンティティ形成の実態が見られることを把握・提示し、「八重山から見える、沖縄イメージの形成・展開と社会変容の実態」を明らかにする。それにより、今後ほかの諸地域・諸領域の研究にも応用可能な、理論的・実証的・方法論的な知見を導くことを目指した。

３．研究の方法

（1）本研究の方法としては、①八重山諸島の地域イメージと社会変容に関する、行政・産業・統計・新聞・雑誌・単行本などの各種文献資料の調査と、②フィールドワークとして、各界の関係者への聞き取り調査が中心となる。文献調査は八重山全域を対象とするが、フィールドワークについては作業量の制約上、今回は石垣島・西表島・竹富島・小浜島にしぼって行うことにした。

（2）１年目は、基礎的な文書資料の収集・整理・読解・分析・記述を中心に作業を行い、八重山の島ごとの特徴と変遷を整理し、それを通して調査研究の視点を構築していった。また並行して、少しずつ関係者にアプローチし、導入的なフィールドワークを開始しておいた。また９月には、沖縄で本研究に関連するシンポジウムを自ら開催し、パネリストや参加者の生の声を聞いて知見を深めるのに加え、イタリア・ヴェネチアで開催される国際シンポジウム「想像の沖縄」に出席し、本年度の中間的な研究成果発表を行った。

（3）２年目・３年目はフィールドワークを中心とし、前年までの作業から整備した調査項目について、関係者へ聞き取り調査を進めていった。８月まで、文献調査を継続しながら、調査地・対象者の選定、質問項目の列挙、具体的なスケジュールなど、調査プランを練り上げた。９月上旬に１週間、石垣島・西表島・竹富島・小浜島でフィールドワークを行い、島ごとに各界のキーパーソンや移住者・観光客などへの聞き取り調査を行った。調査終了後、インタビュー・データのテープ起こしの作業を進め。それをもとにデータ分析を詳細に行った。得られた知見を、文献調査の成果と結びつけて考察を加え、報告書を作成した。

４．研究成果

（1）１年目は、これまでの沖縄イメージの研究を継続し、扱う時期を戦前期から現在にまで広げるとともに、場所も沖縄本島から八重山諸島を中心に置く方向へ、視点を拡大・移行させる形で本課題を進めた。具体的には９月中旬、イタリア・ヴェネチアのカ・フォスカリ大学で開催された第５回沖縄研究国際シンポジウム「想像の沖縄：その時空間からの挑戦」（http://venus.unive.it/okinawa/ja/program.html）の第 10 パネル「エキゾチックな沖縄の宣伝」の中で、「沖縄イメージ、その発生と展開～“想像の沖縄”と、方法としてのツーリスト～」を報告し、その準備を契機として、３年間で行う本課題の初期作業を着実に進めることができた。

また９月初旬には、沖縄で本課題と密接に関連するシンポジウム「沖縄イメージと風景・身体・記憶～海洋博から現在まで～」（ http://homepage2.nifty.com/tada8/sympo06.htm）を自ら企画・主催した。パネリストや参加者の方々から、現地の生の声を多く聞くことができ、今後の課題遂行に有効な知見を得ることができた。10 月には本課題と関連して、沖縄イメージの形成を地域振興や米軍基地の問題との関わりで明らかにする論文を執筆したことで、それまで気づかなかった新たな知見を得ることができた。繰り返し沖縄本島と八重山地域へ出張し、文献調査と聞き取り調査を行い、豊富かつ貴重な資料・情報を収集した。また並行して、むしろ東京でしか集められない戦前・戦後の重要な資料も収集でき、１年目としては充分な成果が得られた。

（2）２年目はまず、前年度末の研究を論文「戦前期の観光における沖縄イメージの形成」にまとめた。戦前期～現在の沖縄の観光とイメージ形成を時系列的にとらえる作業の基礎となった。

５月から夏の調査の準備を進め、情報・資料の収集・整理を行った。予備的な現地調査も実施し、６月下旬には石垣島の「島の未来シンポ」に参加し、知見を深めた。本課題は

一橋大学の学部ゼミのテーマにもして、学生たちと協同作業を進めた。８月には調査地や対象者の選定、アポ取り、質問項目の練り上げ、スケジュールなどの本格的なプランを練り上げ、９月上旬に１週間、石垣島・竹富島・西表島でフィールドワークを行った。終了後、テープ起こしを進めた。これらにより本課題２年目の核となるデータが得られ、研究が大いに前進した。

また９～12 月、世田谷市民大学で「沖縄イメージを旅する」を全 12 回講義し、本課題の内容も盛り込んだため、授業準備が本研究に直結した。11 月には沖縄の地元紙・琉球新報で「戦前の沖縄観光」を全５回連載した。本研究が普及する機会を得られ、広く認識・理解されてきた。

年明け～年度末、調査報告書の作成を進め、4 月 14 日、2007 年度一橋大学社会学部多田治ゼミナール　沖縄・八重山調査報告書『沖縄・八重山諸島のいま～移住・観光ブームによって、島に何が起こっているのか～』を完成させ、私は「八重山の現在：移住ブームとミニバブルの中で」を執筆した。また並行して、戦前から現在までの沖縄イメージの変遷をトータルにとらえる単著の執筆を進めた。沖縄イメージの形成・展開と社会変容の実態を検証し伝えることから、他の諸地域・諸領域にも知見の応用が可能である。

(3) ３年目はまず４月、前年度夏にゼミの学生との共同調査の報告書『沖縄・八重山諸島のいま～移住・観光ブームによって、島に何が起こっているのか～』を作成した。今年度調査の重要な基盤となった。６月には国際学会「Cultural Typhoon 2008 in 仙台」で、セッション「移動・場所・イメージ～移住ブームと開発ラッシュに揺れる沖縄・八重山諸島から～」を開き、研究成果を発表・議論し、貴重な情報・意見の交換ができた。

この成果を盛り込む形で、戦前から現在までの沖縄イメージの形成・展開と社会変容の流れをとらえた新書『沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで』の執筆・編集を進め、8 月に出版した。その中で八重山地域は独自の重要な位置と役割を占め、体系的な整理と把握が行えた上に、一般書として知見を広く世に問うた意義は大きい。

並行して４月から、2008 年度の共同調査を院生・学生と開始し、文献資料の収集・整理・読み込みを進めた。8 月には調査地や対象者の選定、アポ取り、質問項目の練り上げ、スケジュール確定などを行い、9 月上旬に１週間、石垣島・竹富島・西表島・小浜島（前後に補足して沖縄本島・東京）でフィールドワークを行った。終了後テープ起こしを進め、本課題の最終年度の核となるデータが得られた。秋に詳細なデータ分析を行いつつ、関連文献により理論的視点も深めた。12 月から調査報告書の作成を進めた。1 月には日本観光研究学会分科会で研究発表を行い、多様な観光研究の示唆を受けた。2 月には 2007 年度報告書の不充分な箇所を補足・修正し、完全版をウェブで公開し、協力者から貴重な応答をもらった。続いて 2008 年度『沖縄・八重山調査報告書　第２巻　観光と環境、文化と自然の社会学～沖縄・八重山諸島のフィールドワークから～』の編集も行い、4 月半ばにこちらもウェブ公開に至った。

(4) ジョン・アーリ『社会を越える社会学』やアルジュン・アパデュライ『さまよえる近代』などの議論が示すように、グローバル化と移動性が高まった今日の状況は、もはや安定した固定的な「社会」「構造」を前提できず、「ネットワーク」「フロー」のイメージで見ていく方向へ、社会学そのものが根本的な枠組みの変容を迫られてきている。国民国家などの境界空間内に画定された society から、越境的な移動性や不定形な流動性・液状化を基調とする mobility への視点のシフトである。

そんな中、場所はいかに変容していくのか。グローバルな移動の増大とともに、ローカルな場所の意味づけは大きく変わり、経済生活や伝統文化、環境保全などにおいて、場所のアイデンティティは逆説的に、重要度を増していく。移動と場所の結びつきは、今日の社会科学の主要テーマの一つである。

マスツーリズムを通り越した人が、より濃密さを求めてリピーター化し、移住する人もいる。ロングステイ、ドミトリー暮らし、セカンドハウスなど、観光と移住の中間形態も多様化している。移住と観光、ツーリストと生活者、内と外、非日常と日常、雑誌とインターネット、メディアと不動産などの脱-分化、相互浸透が進んできているのである。そのため、当初は観光を中心に考えていたが、いまや観光と移住はなだらかにつながっており、セットで扱う必要があるという着想に至った。

観光・移住ブームにおいて外部者は、カフェや有機農業、ペンションなどのロハス的・都会的なライフスタイルを島に持ち込むが、実際その動きは、ビジュアル雑誌・インターネット・テレビドラマ・映画など、メディアの影響と密接に連動している。また、環境意識の高い移住者は、環境運動やエコツーリズムに精力的に取り組むが、エコツーリズム自体が過度に商品化されてきている面もあり、観光開発と環境保護のジレンマも強まっている。島のローカルな場所・風景を組みかえる主役、環境を守る主役、観光を営む主役が、いずれも外部者が中心であることが、外部者と旧住民の心理的な壁を維持する側面があ

る。こうした地域社会の変貌は、「society から mobility へ」の変容を、具体的に表す事例・様相である。

08 年度調査では、観光・移住・宿泊・カフェ・織物・土産店・景観・環境運動・ダイビング・エコツーリズムなどの個別テーマを探究し、インタビューや参与観察を行った。07 年度調査「沖縄・八重山諸島のいま―移住・観光ブームによって、島に何が起こっているのか―」では、移住・観光ブームに焦点を当てたが、ちょうどその 07 年秋ごろから、世界的な不況の影響もあり、八重山の移住・観光ブームも収束してきた感がある。結果的に 08 年度調査では、07 年度調査の成果に大きく依拠しつつも、直接的なブームという現象を越えて、個別テーマを掘り下げたことにより、調査内容や議論、考察の度合いを深めることができた。

それら個別テーマの掘り下げから、全体としてトータルに浮かび上がってきたのは、観光と移住、地元民と移住者、内と外、観光と環境、文化と自然など、概念上は区別されるはずの諸要素が、小さな島の中では分かちがたく、複合的・多義的に結び合う事態であった。観光・環境・文化・自然などを扱う、さまざまな個別領域の間に立って、ゆるくつなぐ視点と作業が、島の諸アクターの営む現実の複雑さのほうから、むしろ要請されているのではないだろうか。知の交通整理役としての社会学の立場であり、ジグムント・バウマンの言う「解釈者」の役割を社会学が担い、少しでも現場の方々の活動に還元させていただくことはできないだろうか。

このようなささやかな感慨、願いを込めて、08 年度報告書のタイトルを「観光と環境、文化と自然の社会学」とした。08 年の仙台に続き、09 年 7 月 3～5 日に東京外国語大学で開催される国際学会「Inter-Asia Cultural Typhoon 2009」にも、我々は同タイトルで参加し、独立したセッションをもって本報告書の内容を発表する予定である。その英語タイトルは、Sociology ‘between’ Tourism & Environment, Culture & Nature: through the Fieldwork in Yaeyama Islands, Okinawa として、‘between’を強調し、二項の間に立つ立場を明示しておいた。その場でも、実りある報告と議論を展開できれば幸いである。

なお、本研究で得られた知見は、2009 年度からの科学研究費補助金・若手研究（A）「観光・移住・メディアがもたらす地域イメージと文化変容に関する社会学的研究」（研究代表者・多田治）で、さらに掘り下げて展開していく予定である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 多田　治、「観光リゾートとしての沖縄イメージの誕生：沖縄海洋博と開発の知」、『一橋大学スポーツ研究』、査読無、27 号、2008 年、61-66 ページ

② 多田　治、「戦前期の観光における沖縄イメージの形成―国家主義時代の観光と知―」、『一橋社会科学』、査読無、3 号、2007 年、1-53 ページ

〔学会発表〕（計３件）

① 多田　治、「沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで」、日本観光研究学会分科会、2009 年 1 月 12 日、武蔵大学

② 多田　治、「八重山の現在：移住ブームとミニバブルのなかで」、国際学会「Cultural Typhoon 2008 in 仙台」、セッション「移動・場所・イメージ～移住ブームと開発ラッシュに揺れる沖縄・八重山諸島から～」2008 年 6 月 29 日、せんだいメディアテーク

③ 多田　治、「沖縄イメージ、その発生と展開～“想像の沖縄”と、方法としてのツーリスト～」、第５回沖縄研究国際シンポジウム「想像の沖縄：その時空間からの挑戦」2006 年 9 月 16 日、イタリア・ヴェネチア、カ・フォスカリ大学

〔図書〕（計３件）

① 多田　治、ミネルヴァ書房、松野弘・土岐寛・徳田賢二編『現代地域問題の研究――対立的位相から協働的位相へ』、「地域問題の現代的縮図としての〈沖縄問題〉――基地と振興の視点から」2009 年、22 ページ（285-306 ページ）

② 多田　治、中央公論新社、『沖縄イメージを旅する――柳田國男から移住ブームまで』、2008 年、285 ページ

③ 多田　治、彩流社、一橋大学社会学部編『連続市民講座　市民の社会史　戦争からソフトウェアまで』、「観光の社会史――沖縄イメージを旅する」2008 年、16 ページ（219-234 ページ）

〔その他〕

・学会以外の口頭報告

① 多田　治、研究会報告「観光リゾートとしての沖縄イメージの誕生：沖縄海洋博と開発の知」、一橋大学スポーツ科学研究会、2008 年 1 月、一橋大学

② 多田　治、市民講座「沖縄イメージを旅する～基地とリゾート、二重の現実」、2007 年 9 月-12 月（全 12 回）、世田谷市民大学

③ 多田　治、市民講座「観光の社会史～沖縄イメージを旅する」、一橋大学社会学部連続市民講座 2007「市民の社会史」、2007 年 7 月、一橋大学兼松講堂

④ 多田　治、シンポジウム報告「石原都政とオリンピック招致への問い～巨大イベント・臨海開発・ネオナショナリズム～」、第 37 回一橋祭シンポジウム「2016 年オリンピック招致を知ろう～オリンピック日本開催とその効果～」（司会も務める）、2006 年 11 月、一橋大学

⑤ 多田　治、実行委員長・司会「沖縄イメージと風景・身体・記憶～海洋博から現在まで～」、2006 年 9 月、琉球大学

・ホームページで公開中の研究成果

① 多田　治編、『2008 年度一橋大学多田治ゼミナール　沖縄・八重山調査報告書第２巻　観光と環境、文化と自然の社会学～沖縄・八重山諸島のフィールドワークから～』2009 年 4 月版
http://homepage2.nifty.com/tada8/08yaeyama.contents0904.htm

② 多田　治編、『2007 年度一橋大学社会学部多田治ゼミナール　沖縄・八重山調査報告書　沖縄・八重山諸島のいま～移住・観光ブームによって、島に何が起こっているのか～』2009 年 2 月完全版（冊子もあり）
http://homepage2.nifty.com/tada8/07yaeyama.pdf

③ 多田　治「戦前期の観光における沖縄イメージの形成―国家主義時代の観光と知―」『一橋社会科学』3 号、2007 年
http://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/rs/bitstream/10086/14012/1/shakaikg0000300010.pdf

・新聞記事

① 多田　治、「リゾートと伝統文化２　多面的視点養う好機に　観光をとらえ返すヒント」『沖縄タイムス』2009 年 5 月 4 日

② 多田　治、「戦前の沖縄観光：国家主義時代のイメージと知」1～5、『琉球新報』2007 年 11 月 10・12・13・20・21 日、朝刊

③ 多田　治、「９月時評・八重山の現在」『琉球新報』2007 年 9 月 24 日朝刊

④ 多田　治、「５月時評・沖縄の現実と知」『琉球新報』2007 年 5 月 28 日朝刊

⑤ 多田　治、「１月時評　再考・反復帰と独立」『琉球新報』2007 年 1 月 29 日朝刊

⑥ 多田　治、「９月時評・想像の沖縄」『琉球新報』2006 年 9 月 26 日朝刊

⑦ 多田　治、「沖縄イメージの系譜と現在（下）」『沖縄タイムス』2006 年 8 月 31 日朝刊

⑧ 多田　治、「５月時評・沖縄から遠く離れて」『琉球新報』2006 年 5 月 29 日朝刊

・辞典項目執筆（本課題と関連するもの）

① 多田　治、「メディア」渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也編、吉川弘文館、『沖縄民俗辞典』、2008 年

６．研究組織

(1)研究代表者
多田　治（TADA OSAMU）
一橋大学・大学院社会学研究科・准教授
研究者番号：８０３１８７４０

(2)研究協力者
秋山　道宏（AKIYAMA MICHIHIRO）
一橋大学・大学院社会学研究科・博士後期課程（研究協力者およびリサーチ・アシスタント）

柳田　理紗（YANAGIDA RISA）
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程

小股　遼（OMATA RYOU）
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程

畠山　嵩（HATAKEYAMA SYUU）
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程

佐藤　由佳（SATOU YUKA）
一橋大学・大学院社会学研究科・修士課程